

## 埼玉県立自然の博物館展示解説書

## 埼玉の自然誌 ～埼玉の自然を知る・学ぶ～

井上 素子

この度、当館は新たに展示解説書を作成いたしました。平成 27 年度に当館所蔵の化石標本が国指定天然記念物「古秩父湾堆積層及び海棲哺乳類化石群」に指定されたことなどから、数年をかけて、常設展示室の改修を行ってきました。今年の 1 月に「埼玉の多様な生きものコーナー」が完成し、改修が一区切りしたため、新たな展示に合わせて解説書の改定を行った次第です。

## 4 代目のコンセプトは「埼玉の自然誌」

今回発行する展示解説書は、昭和 56 年の開館当初に発行した初代解説書から数えて 4 冊目に当たります。初代解説書は、展示制作に係わった方々の思い入れが伝わる充実した内容ですが、残念ながらカラーページや写真が多くありません。開館 10 周年を機に平成 3 年に刊行した 2 代目の展示解説書は、これを補う形でカラー写真を充実させ、主要な展示物を詳しく解説しています。3 代目の解説書は、平成 18 年に当館の館名を「埼玉県立自然史博物館」から「埼玉県立自然の博物館」へと変更したことに伴い、平成 23 年に刊行しました。

周囲の豊かな自然と一体化した当館の立地を生かして、展示とともに自然を観察してほしいと、紙面の半分を長瀬の自然の紹介に充てました。

さて、今回の常設展示図録は、展示物の紹介というよりは、埼玉の自然誌を紹介することに、主眼をおきました。「自然誌（自然史）」とは Natural History の和訳です。当館の英名は Saitama Museum of Natural History です。Natural History は自然を科学的に記述する学問を指し、地質学、地理学、分類学、生態学など、主にフィールドワークを通じて自然を観察・記述してきた分野がこれに含まれます。解説書の主題を「埼玉の自然誌」としたのは、皆様が本書を通じて埼玉県の特徴をより深く知り、興味を深め、フィールドワークへの入り口として頂きたいと考えたからです。

博物館の展示の魅力は、実物と対面し、五感を使って観察できることにあります。このことは、図鑑やウェブサイトでは決して代用できません。一方で、より深く自然を学びたい利用者からは、埼玉県ならではの地史や生物相の特徴を分かりやすく紹介した本が待望されてきました。本書で

## 歴代の展示解説書



埼玉県立自然史博物館  
展示ガイド  
B5判 58P.



埼玉県立自然史博物館  
総合案内  
B5判 71P.



埼玉県立自然の博物館展示案内  
地球の窓・長瀬の自然  
B5判 56P.

※友の会ショップ(不定休)で  
現在も販売中です。



埼玉県立自然の博物館展示解説書

埼玉の自然誌

～埼玉の自然を知る・学ぶ～

A4判 100P.

埼玉の自然の大枠を学び、展示室で実物を見て理解を深め、自然観察に出かけ、そこで発見した自然物や情報を博物館へフィードバックする…このような好循環が生まれることを期待して本書を作成しています。

### 埼玉県とはいかなる場所かを浮き彫りに

埼玉県には海や湖がなく、高山や火山もありません。埼玉県の自然は何の特徴もないと多くの人が思っているのではないのでしょうか？日本列島の自然における埼玉県の位置づけを知れば、見慣れた風景も違って見えてくるはずです。

埼玉県の西半分は関東山地、東半分は関東平野です。関東山地には日本列島の土台を構成する主要な岩石が狭い範囲に凝縮しています。そのため明治時代の地質学黎明期から多くの地質学者が当地を訪れ、日本列島の基本構造を明らかにしていきました。一方、日本一の広さを誇る関東平野では、山地を構成する土台の岩石が数千mも地下に埋没し、その上を新しい時代の堆積物が埋めています。このような構造はいつどのようにしてできたのでしょうか。本書では、3億年におよぶ埼玉の地史を4つの時代に分け、各時代に日本はどのような状態で、その時埼玉はどんな場所だったのかを、図やイラストを多用して紹介しています。

埼玉県には、これまで15,000種以上の生物が記録されています。かつて南北で大陸と繋がっていた地史を持つ日本列島。その中央に位置する埼玉県では、北方系・南方系両方の要素を含む生物相が育まれています。本書では、埼玉県の生態系を復元した大ジオラマの展示に即して、各々の生物相を豊富な写真とともに紹介しています。本書を手にしながらかつ大ジオラマの中の動植物を探してみてください。展示では紹介しきれていない話題は、数多くのコラムとして紹介しています。

### とはいえ簡単なことではありません

個々の展示物を紹介することはそれほど難しいことではありません。しかし、地史や生物相を紹介しようとする、突然ハードルが上がります。自然は非常に複雑で、明治以降の数えきれない研究成果を結集しても、今だに定説が確立していない事象が多いからです。公の博物館として一説を採用できない事情が本書のようなコンセプトの本の刊行を妨げてきました。埼玉の自然誌をわかりやすく伝えるために、学芸職員が批判を恐れず執筆していることをどうぞ御理解いただき、本書を御覧になっていただければ幸いです。

(いのうえ もとこ・主任学芸員)

